印象１０編―７月の総評に代えて

○林　　桂○

●高良真実●

花の体内時計のことを
言いかけてプレートに
桃と書いてある花

＊春夏秋冬の決まった季節、朝昼夕夜の決まった時間に開花するからには、花は私達よりも優れた「体内時計」を持っているに違いない。公園や歩道などには、植えられた樹木の名前のプレートが掲げられている。「桃」と書かれた花の前での会話であったことが知られる。誰もが知っていて、プレートの必要もなさそうな花である「桃」。花の属性の「体内時計」を思いながら、「桃」と名付け、表示することに違和感のようなものが生まれているのだろう。

●加藤美紀●

半夏生
タコの唐揚げ食べながら
この地に根付いていない四年目

＊半夏生は主に西日本に自生する植物らしい。タコの唐揚げも、どこにもありそ

うで、特定の地域を思わせる食物なのだろう。かつての作者の生活圏では、共に目にすることがなかったものなのだろう。違和感は、大きな物からではなく、こうした日常の小さな属目から生まれるものなのだ。その違和感が「この地に根付いていない」自分を発見させる。

●白シャツ●
うまい棒よか
棒つきのわたあめに成りたい

＊「よか」は「より」の口語的表現だろう。そもそも、このような願望の意味が不明である。どちらもなりたいと思うか？　しかし、その不明さによって、作者の心の不分明な存在は知ることはできる。

●春町美月●
ティッシュで作ったみたいな
芍薬の
迫力と儚さを眺めていた
雨の窓辺

＊雨に濡れた芍薬の花を「ティッシュで作ったみたい」という。そこに「迫力と儚さ」を感じるという。白い芍薬の花は雨で、崩れ、散りはじめているのだろう。

●うすしか●
卒業アルバムで
笑ってる方の佐藤が
死んだ方の佐藤

＊卒業アルバムを前に説明をしている場面だろう。相手は同窓生。亡くなった同級生「佐藤」の情報は知っているが、詳細は知らないのだ。そこでアルバムで、確認するのである。開けば、その「佐藤」は笑顔である。明るい性格、キャラクターであったのだろう。「佐藤」はクラスに複数いそうな姓である。「死」の唐突性が立ち現れる。

●鳴海幸子●
蛙ぴょこぴょこみぴょこぴょこ
かえるのたまごはみどりいろ

＊早口言葉を、二行目で詩的な文脈に変換する。虚構の「みどりいろ」も効いている。

●加藤美紀●
山ほどの
野菜の小包を解いて
入院支度に常備菜を作る

＊故郷から送られてきた夏野菜を、「常備菜」に加工する。塩漬け、酢漬けの類

だろうか。日持ちのする保存食加工だが、それを「入院支度」とする。自身のためではなく、入院で不在の間の家族のためのものである。

●佐藤美貴子●

ポケットに
いつかの飴のつつみがみ
どこにも見あたらないような
ぼくたち

＊確かにいつか食べた飴の包み紙だけがポケットに残っているようなことはある。処分を忘れたままでポケットにしばらくの間残っていたのである。そこから「どこにも見あたらないような／ぼくたち」を類想する。その寄る辺なさが切ない。

●桜望子●

ひまわりは
人間のようで
怖くなる
いつか必ずくるさようなら

＊「いつか必ずくるさようなら」は、こと新しいテーマではない。しかし、変わることのないテーマでもある。人間の立ち姿にも見えるヒマワリ。「怖くなる」思いが、最終行を導いてくる。

●長谷川柊香●

吊革のすつと傾き夕立晴

＊「すつと傾き」が巧みだ。電車（あるいはバス）が減速したか、曲がったかして、吊革は一斉に同じ方向に振られる。窓には夕立の後の洗われたような晴間が広がっている。窓外の景色も俄に変わった瞬間だろう。